

久留米大学

比較文化研究所年報

第 17 号

2023

比較文化研究所年報

第 17 号

2023

目 次

はじめに	1
比較文化研究所の概要	2
活動報告（2023 年度）	
1. 研究部会報告	
(1) 地域社会経済研究部会	5
(2) 地域博物館研究部会	7
(3) 文化財保存科学研究部会	9
(4) 地域精神保健福祉研究部会	10
(5) 欧州研究部会	11
(6) 心理教育研究部会	12
(7) 日本・アジア比較文化研究部会	14
(8) 歴史科学研究部会	15
(9) 筑後川流域圏研究部会	18
(10) イスラーム研究部会	21
(11) 地中海地域研究部会	22
2. 研究員発表会	25
3. 日誌(運営会議、研究所会議等)	26
施設・設備	27

はじめに

比較文化研究所長

原口 雅浩

2023 年度の活動報告として、久留米大学比較文化研究所年報第 18 号をお届けします。

本研究所は文系大学院の設置母体として出発し、主に比較文化研究科設置に貢献するとともに教育・研究をも担ってきました。その後、2001 年から専門研究部会が設けられ、当初の 5 部会から 14 の研究部会にまで増え、現在の活動に至っています。それぞれの研究部会では、調査研究、そして地域にも開放された公開講座、シンポジウムやセミナー等の様々な研究活動を行っているところです。

これまでも比較文化研究所としての学際的・総合的研究活動の推進と、成果の社会還元を続けてきましたが、今後も一層の共同研究の進展は必要であると考えられます。

本研究所の活動が、所員や地域の方々を始め様々な関係者に支えられてきたことに感謝申し上げ、今後とも関係各位の皆様のご指導、ご支援を頂きたく宜しくお願い致します。

比較文化研究所の概要

比較文化研究所は、1987 年に久留米大学付属の研究所として創設されました。

研究所の目的は、「新しい学際的統合を基本理念として、文化の構造と機能に焦点を当てた総合的比較文化研究を行うこと」(比較文化研究所規程)であり、学問領域を超えて学際的な研究の推進を図ることを目指すものです。

設立当初は、文系学際大学院「比較文化研究科」を設置するための母体として、大学直属の研究所として設置されました。大学院比較文化研究科の研究機能を受け持つという性格上、専任所員及び大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のみによって組織されており、研究所長もまた、比較文化研究科委員長(現在の比較文化研究科長)が兼任しておりました。

その後 2001 年において、研究所の組織が改正され、比較文化研究所に、大学での研究成果を地域や社会へ還元するという役割が加わりました。それに伴って、組織も変更され、比較文化研究所所員も大学院担当教員を中心にその他の希望する専任教員にまでその枠が広がられました。

研究所では、多くの研究部会を組織しそれぞれのテーマで活発な研究活動を行うとともにその成果の公開に努めています。

ほかに研究所としての活動として、次のような研究プロジェクトを実施してきました。

まず、2006 年度より、研究成果の地元地域への還元を意図して地元である筑後川流域圏を対象地域とした研究を行うというプロジェクト研究「筑後川流域圏の総合研究」を開始しました。2006 年度～2007 年度においては大川地域、2008 年度～2009 年度においては旧三潴郡、2010 年度～2011 年度においては旧久留米市、2012 年度～2013 年度においては、うきは市および朝倉市、2014 年度からは日田地区を実施し、それぞれの地域の『研究報告書』を発行してまいりました。

以上の研究プロジェクトは 2015 年度をもって終了しています。

いずれの研究事業も、比較文化研究所の研究成果の地域への還元、さらには久留米大学と地域との連携強化を図るものであります。

2023 年度においては次のような組織・体制となっております。

組織体制

所 長	原口 雅浩 (2022. 4. 1～2024. 3. 31)
所 員	2023 年度：76 名(専任所員なし)

	大学院比較文化研究科後期博士課程の教員 20 名
	大学院心理学研究科後期博士課程の教員 3 名
	任意に加入する助教以上の教員 53 名
特別研究員	2023 年度：13 名
研究部会研究協力者	9 名
	(文化財保存科学研究部会 8 名、筑後川流域圏研究部会/日本・アジア比較文化研究部会 1 名)
研 究 員	2023 年度：4 名

所員は、専任所員、大学院比較文化研究科後期博士課程の教員のほか、大学院心理学研究科後期博士課程の教員および任意に加入する助教以上の教員により構成されています。

研究体制としては、「研究部会」を置き、各研究部会長が研究活動の中心として研究活動をリードしています。2023 年度における研究部会は以下の通りです。

- 1) 地域社会経済研究部会(部会長 松石 達彦教授)
- 2) 地域博物館研究部会(部会長 吉田 洋一教授)
- 3) 文化財保存科学研究部会(部会長 大庭 卓也教授)
- 4) 外国語教育研究部会(部会長 李 偉教授)
- 5) 地域精神保健福祉研究部会(部会長 辻丸 秀策教授)
- 6) 民事法研究部会(部会長 石川 真人教授)※休会
- 7) 欧州研究部会(部会長 大場 はるか准教授)
- 8) 心理教育研究部会(部会長 園田 直子教授)
- 9) 会計専門職研究部会(部会長 杉野 博貴教授)※休会
- 10) 日本・アジア比較文化研究部会(部会長 神本 秀爾准教授)
- 11) 歴史科学研究部会(部会長 福山 裕夫教授)
- 12) 筑後川流域圏研究部会(部会長 浅見 良露教授)
- 13) イスラーム研究部会(部会長 佐々木 拓雄教授)
- 14) 地中海地域研究部会(部会長 畠中 昌教准教授)

研究員は、後期博士課程を満期退学した者で、その後も研究を続け博士学位論文の作成を目指す者等が含まれます。指導教員の指導の下、各自の専門分野の研究を行っています。

<審議>

比較文化研究所には、主として次の2つの審議組織があります。

研究所会議：所員全員からなる組織で、規程、運営方針、予算、人事等に関する審議を行います。

運営会議：所長、研究部会長からなる組織で、15名の委員で構成されています。研究所の運営に関する中心的な審議機関となります。

また、学部等との連絡調整を図り、研究所の円滑な運営を期するため、研究所協議会が置かれています。協議会は、所長、副学長、学部長、大学院研究科長、所員の教授5名によって組織されています。

<研究成果の公表>

『比較文化研究』

研究所の紀要として原則として年1回発行しています。1987年に『比較文化研究所紀要』第1輯を発行し、1993年発行の第14輯からは『比較文化研究』と改称しています。

また、2009年度より査読制をとっております。

第60輯の主な内容は、以下の通りです。

『比較文化研究』第60輯(2024年3月発行)

[論文]

高木 恵

野田宇太郎旧蔵「五足の靴」書写原稿に関する一考察

池田 博章

一人暮らし後期高齢者の日常の不安と相談先との関係性

：久留米市の高齢者調査の結果を基にして

[報告]

福山 裕夫・綾杉 るな・伊藤 まさ子・内倉 武久・古賀 達也・福永 晋三・正木 裕
九州の歴史民俗を考える：久留米大学公開講座ノートより

『比較文化研究所年報』(本冊)

比較文化研究所における1年間の研究成果の報告および学外への周知を目的に、2008年度(2007年度の報告)より発行を開始しました。

各研究部会・研究員の研究成果の公表

各研究部会などにおいても出版物等による研究成果の発表が行われています。

詳細につきましては、各研究部会等の報告(後述)をご参照ください。

また、2006年度から年度末に研究所セミナー(活動報告会・交流会)を開催し、その年度における研究成果の発表が行われています。なお、2023年度は、昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大の現状を鑑み、昨年同様、開催しないこととしました。

活動報告（2023 年度）

1. 研究部会報告

地域社会経済研究部会

部会長 松石 達彦

1. 経済学部地域経済社会研究所との共同研究

本プロジェクトは、松石、松下、大矢野が中心となって活動しており、予算の関係で、経済学部地域経済社会研究所（松石、葉山、畠中、大矢野）との共同研究も行っている。

2. 久留米大学公開講座の実施

『古事記』・『日本書紀』の世界を中心とした「九州王朝」を定説的な近畿王朝論との関係で考察した。神武東征や日本武尊・武内宿禰の日高見国報告と九州王朝との関係を背景に、「九州王朝論と近畿王朝論」との関係で考察した。

第1回：11月5日（日）13：00～14：30

「九州王朝論と近畿王朝論」講師：久留米大学文学部 教授 福山 裕夫

第2回：11月5日（日）14：45～16：15

「九州王朝と近畿王朝論の比較」講師：久留米大学 名誉教授 大矢野 栄次

第3回：11月12日（日）13：00～14：30

「日本人とは何か」講師：久留米大学文学部 教授 福山 裕夫

第4回：11月12日（日）14：45～16：15

「九州王朝の終焉と近畿王朝」講師：久留米大学 名誉教授 大矢野 栄次

3. うきは学(旧：久留米大学公開講座)「うきは市の歴史や筑後川流域の文化等」

会場;うきは市民センター（図書館） 3階 大会議室・小ホール

第1回 10月7日（土）

13:00～14:30 大矢野 栄次（久留米大学名誉教授）「神武東征と双方中円墳のうきは市」

14:40～16:10 大矢野 栄次（久留米大学名誉教授）「橘広庭と齐明天皇」

第2回 10月14日（土）14:00～15:30

木本 博（古代史研究家、元システムエンジニア）「邪馬台国への“道”が分かった」

第3回 10月21日（土）14:00～15:30

岡寺 良（立命館大学 文学部准教授）「うきは市周辺の中世城郭

～耳納北麓の山城を中心に」

4. 佐賀低平地研究会地域創生専門部会との共同開催プロジェクト（大矢野、松下）

月例研究会を行い、地方創生に関し自治体や企業との研究会・勉強会を行っている。

(1) 勉強会「佐賀平野と有明海の歴史」

佐賀低平地研究会地方創生部会との共同研究では、有明海の歴史と経済についての研究が本年度のテーマである。

本年度は、勉強会の成果として「佐賀の歴史Ⅱ—中世史編」(大矢野栄次・矢野生子共著、五弦社、2023年10月)を発行した。

(2) 西九州新幹線と物流新幹線構想

佐賀低平地研究会地方創生部会と当研究会の共同研究として、物流新幹線構想の研究を行っている。本年度は、現在未解決の問題となっている西九州新幹線について低平地研究会地方創生部会報告書「西九州新幹線議論の経過と今後Ⅱ—九州の地方創生と JR 九州の再生」を作成した。

5. 学会発表

上記研究のうえ、地方創生の課題解決をもとに「マクロ経済政策の今日の課題」(松下愛)(2023年12月、マクロ経済学、会場：九州大学)と題して、九州経済学会において発表した。

地域博物館研究部会

部会長 吉田 洋一

運営（研究）テーマ

地域博物館研究部会は、筑後川水系を中心に形成された地理的環境のもと、筑後川流域の将来計画を策定するうえでの大学組織の役割として、周辺自治体や市民と協力・連携し、歴史的環境を保持しながら地域文化の次世代への継承を目的としている。

運営（研究）計画

- ①九州管内を中心とした地域博物館の現地調査・視察
- ②筑後川水域関連資料の保存・収集（学生への還元）
- ③久留米大学関連資料の保存・収集（学生への還元）

2023 年度の活動報告

①史料調査

2016 年度より「(仮) 久留米藩政史料」(本学御井図書館所蔵)の調査を継続中である(詳細は『久留米大学比較文化研究所年報第 10 号』2017 年、参照)。

【2023 年度調査実績 (調査年月日：当日参加人数)】

2023 年 4 月 22 日 (土) : 7 名	5 月 28 日 (土) : 4 名	6 月 18 日 (日) : 3 名
7 月 15 日 (土) : 3 名	8 月 18 日 (土) : 4 名	9 月 23 日 (土) : 6 名
10 月 28 日 (土) : 5 名	11 月 25 日 (土) : 4 名	12 月 23 日 (土) : 2 名
2024 年 1 月 27 日 (土) : 4 名	2 月 17 日 (土) : 5 名	3 月 16 日 (土) : 5 名

参加者一覧 (括弧内は本年度)

吉田 洋一 (本学文学部)、小澤 太郎 (久留米市役所)、杉谷 善子 (本学研究生)、
藤木 郁名 (本学学生)、中川 壽賀子 (八女市立図書館)、翁長 亜紀・松永 華子・西本
紗也 (御井図書館委託職員)、板橋 皓世・花田 洋子 (木曜古文書会)

②ニューズレター (第 11 号) の発行

シンポジウム「歴史をつなぐ 高野山の文化財」(2022 年 12 月 4 日) 特集号

平成 29～令和元年度に久留米市が実施した「高良大社所蔵歴史資料調査」の成果について一般向けに分かりやすく報告し、高良山の文化財を未来に伝える活動について考える機会とするイベントを行った (役職などは当時のもの)。

開会あいさつ 竹間宗麿 (高良大社宮司)

基調講演 藤田励夫 (文化庁文化財第一課主任調査官) 「文化財を守る仕事ー古文書を中心にー」

- 報告 穴井綾香（久留米市市民文化部文化財保護課）「高良大社所蔵歴史資料調査について」
- 松川博一（九州歴史資料館 学芸員）「高良山の歴史と文化」
- 松本長人（高良大社 権禰宜）「御山の宝物と人々」
- 山口淳（高良山観光ボランティアガイドの会）「高良山のボランティアと地域活動」
- 吉田洋一（文学部教授）「地域の歴史遺産と大学の役割」

パネルディスカッション「守り、伝える 高良山の文化財」

報告者＋コーディネーター 中野等（九州大学比較社会文化研究院教授）

「九州の図書館・博物館」コラム 佐藤来未（高良大社非常勤学芸員）



2023 年度活動計画

- ・筑後川流域圏及び有明海沿岸地域を中心とした現地調査や史料の探求・公開、外部講演などの成果を、学生や市民へ還元する。
- ・ニューズレターの発行

文化財保存科学研究部会

部会長 大庭 卓也

本年度は、筑後地方の伝統工芸を顕彰するために、次のような活動をした。

○「はじめてのくるめがすり」

令和五年六月二十七日、国際文化学科田中優子ゼミナールの学生で、八女郡広川町にある久留米絣製作工房・坂田織物を訪問し、絣製作の様子を見学した。

また、同年七月二十日、久留米絣協同組合から提供を受けた絣の着物を、文学部を中心とした学生若干名（別科生、台湾長庚大学からの留学生を含む）が着用し、同日 900 号館つながるめ一階にて催されていた「KURUME BOOK CAMPUS」に参加。後日、各自が絣の着物の着心地などをレポートにまとめた。

○「伝統工芸の国・筑後」の増刷

明治二十年前後の久留米に誕生した「藍胎漆器」の伝統的な製作技法を守り続ける、井上正道氏（藍胎漆器塗師、井上らんたい漆器〈久留米市小頭町〉代表取締役）と、狩野啓子氏（久留米大学名誉教授）の対談を収録した、第四号「井上正道氏（藍胎漆器塗師）の話を聴く（二）」、第五号「 同 （三） 」を増刷し、各方面に配布した。

○狩野啓子・神本秀爾編『和紙と藍に魅せられて - 筑後の伝統工芸 - 』の寄贈

本書は、本部会の所属員および関係者で分担執筆し、令和四年三月に出版されたが、より広い範囲に流布させるべく、関係者各位、関係諸機関へ寄贈することとし、郵送した。なお、本書は来年度に第二版を出版する計画が進みつつあることも付記しておきたい。

また、本年度の部会の予算にかかわるものではないが、文化財保存の研究の活動としては、クララ紙（古来、防虫効果があるとされる、いわゆる「苦参紙」）を八女和紙職人の溝田俊和氏（溝田和紙工房）に製作を依頼し、本学御井図書館所蔵の軸物類の保存に活用してみたこと、また、久留米の久本表装店に依頼して、御井図書館所蔵の和装本を八女和紙で補修したことなども、ここに記しておきたい。

地域精神保健福祉研究部会

部会長 辻丸 秀策

以下の研究を行い、その成果を発表した。

研究タイトル：中国と日本における大学生の認知症の人に対する態度調査—中国の A 大学と日本の B 大学の福祉・看護学科学生と比較調査を中心に—

成果の発表：「福祉学科学生の認知症の人に対する態度とイメージおよび認知症知識に関する日中比較—日本の A 大学と中国の B 大学との比較調査を通して—」（『厚生指標』第 70 巻第 7 号，2023 年，pp. 7-15）

内容：中国と日本における福祉学科学生を対象に認知症の人に対する態度、イメージおよび認知症に関する知識の実態について量的調査を行った。

中国と日本の福祉学科学生の比較を行った結果、両国の福祉学生がともに認知症の人に対する総合的な肯定的態度を持つ傾向があったが、下位尺度の肯定的態度および否定的態度では、中国の福祉学科学生の方の両方とも強かった。また、認知症に関する知識では、両国の福祉学科学生がともにやや高い知識を持つ一方、中国の福祉学科学生の方がよりポジティブなイメージを持つことが示された。

欧州研究部会

部会長 大場 はるか

本年度は昨年度に続き、今後の欧州部会の活動について協議する傍ら、メンバーのヨーロッパ関連の教育研究活動に予算を使用した。12月には外国語研究所との共催で、留学生と日本人学生の交流を目的としたクリスマスパーティーを実施した。その際、デンマークのクリスマスによく行われるゲームを実施し、学生たちにプレゼント交換をさせた。

1月23日には石橋文化センターの職員さんと協議をし、来年度から石橋文化センターのバラ園の剪定作業で廃棄物となった花びらや蕾を久留米大学の学生たちに譲っていただけるよう交渉した。この交渉は、近年問題になっているフラワーロスの問題を、学生たちとともにアップサイクルによって解決するためである。欧州では花びらや蕾を乾燥させ、ポプリにして飾る文化がある。バラをハーブティーとして飲み、体調管理をする習慣もある。このため、今後はハーブの勉強・活用やポプリ制作を学生たちや石橋文化センターと共同で進めていけるよう、各方面との相談を進めた。

2月20～21日には、ヨーロッパ史の研究のため大学院への進学を希望している学生の勉強と進学相談のため、部会長の大場が当該学生を神戸まで引率した。当該学生は大場とともに神戸市博物館の日欧関係史料の観察と、神戸大学西洋史学研究室での進学相談を行った。その後大場は京都に移動して京都大学白眉センター特任准教授の小俣ラポー日登美氏と面会し、フランスとスイスでのハーブ活用とこれに関する歴史学研究や日欧交流史などについて情報交換を行った。

このほか、大場がウィーンのオーストリア科学アカデミー附属文書館と共同で進めている Margret Dietrich (1920-2004 年) の遺稿整理の関係で、1月にウィーン大学の日本人大学院生に人夫賃を支払って、遺稿のナンバリングとスキャン作業を進めてもらった。当該の遺稿は近世欧州の日本関係史料を翻刻・翻訳したものであり、ナンバリングとスキャン作業後に大場が研究に使用する予定である。

心理教育部会

部会長 園田 直子

心理教育部会で2023年度に実施した活動内容を報告します。本部会では「協同教育研究会」と銘打って協同教育に関する研究会を続けています。今回は第58回と第59回の活動内容を報告します(企画責任者 安永 悟)。本研究会は日本協同教育学会(九州支部研究会)および全国個集研(久留米地区研究会)、初年次教育学会(初年次教育実践交流会)の公認を受けています。

1. 第58回 協同教育研究会

テーマ: 「協同教育と対話」 日時場所: 2023年9月23日(土) 御井本館13BC教室

主催: 協同教育研究所「結風」 後援: 久留米大学比較文化研究所

プログラム:

- | | |
|-----------------------------|-------------|
| (1) 挨拶・導入: | 13:00~13:20 |
| (2) 協同カフェ: グループ活動って、難しい・・・? | 13:20~14:30 |
| 平上久美子・比嘉真子(名桜大学) | |
| (3) 講話と対話: 協同教育とは何か | 14:40~16:10 |
| 関田一彦(創価大学) | |
| (4) 連絡・閉会: | 16:10~16:15 |
| ○情報交換会(飲食なし) | 16:15~17:00 |

総括:

今回の研究会では「協同教育」を再度問い直し、協同教育と協同学習の関係や基本概念を再確認し、参加者全員でグループ活動について前提条件なしに語り合いました。参加者は38名でした。

2. 第59回 協同教育研究会

テーマ: 「LTD授業モデル」 日時場所: 2023年2月25日(土) 御井本館13BC教室

主催: 協同教育研究所「結風」 後援: 久留米大学比較文化研究所

プログラム:

- | | |
|------------------------------------|-------------|
| (1) 挨拶・導入: 挨拶と場づくり・LTDモデルの紹介 | 14:00~14:35 |
| (2) 実践報告1: 協同学習による講義・実習への初めてのチャレンジ | |
| 増田 宏(久留米大学) | |
| 14:35~15:15 | |
| (3) 実践報告2: LTD授業モデルによる授業開発とその成果 | 15:30~16:50 |
| 安永悟・小松誠和(久留米大学) | |
| 知念榮子・大城明枝・藤田裕美子(浦添看護学校) | |
| (4) 全体交流: | 16:50~17:15 |

(5) 連絡・閉会

17:15～17:20

○情報交換会（学内レストラン・櫺）

18:00～20:00

総括：

LTD 授業モデルによるアクティブラーニング型授業の質向上をめざした取り組みが広がりを見せています。今回の研究会では関連する実践事例を3件報告し、参加者との議論を深めました。研究会には全国から52名が、また情報交換会には16名が参加しました。

日本・アジア比較文化研究部会

部会長 神本 秀爾

1. 部会員による研究報告・発表

2023 年度は以下の研究報告・発表がおこなわれた。

- ・5月19日 浦田義和 「日本近代文学とイスラーム」
- ・7月28日 ディヌウシャ・ランブクピティヤ 「スリランカの文化と宗教」
- ・11月17日 古賀幸久 「『悪魔の詩』サルマン・ラシュディ」
- ・1月26日 ガーダ・アブディルカリーム 「エジプトに於けるイスラム教」

2. その他

- ・9月5～6日 天草合宿、『五足の靴』を手がかりにした現地探索」
- ・2024年2月23日 徳永博基氏「(特別講演)」世界情勢と地域との連携についてーベラルーシ大使と外務省大臣官房総務課地方連携推進室の経験を踏まえて」(地域連携センターと共催、後援法学部)

特別講演

入場無料

**世界情勢と
地域との連携について**

ベラルーシ大使と外務省大臣官房総務課地方連携推進室の経験を踏まえて

**2024
2/23** **金祝日**

15:00～17:00 (受付 14:30～)

**久留米大学御井キャンパス
御井本館3階 13A教室**

講演要旨
初代駐ベラルーシ特命全権大使、外務省大臣官房総務課地方連携推進室長など多彩な外交官としての経験を基に、現在の「ロシア・ウクライナ戦争」の直接影響下にあるベラルーシの視点からみた戦争の見方や、日本及び国内の地域的視点から国際情勢をどのように認識し、対応していくことが大事であるか、どのように地域が世界と付き合っていくべきか等について、その知見を活かして貴重なお話をさせていただきます。



講師 徳永 博基 氏
初代駐ベラルーシ特命全権大使
福岡県柳川市、久留米大学附設高校出身。1982年英国、ソビエト研修後ポーランド及びカザフスタン大使館、外務省大臣官房総務課地方連携推進室、ベラルーシ大使館参事官、2019年より2023年まで初代駐ベラルーシ特命全権大使。

主催：久留米大学比較文化研究所（日本アジア比較文化研究部会）& 久留米大学地域連携センター
後援：久留米大学法学部

お問い合わせ 久留米大学地域連携センター事務局
TEL 0942-43-4413

古賀 幸久（法学部国際政治学科客員教授）
携帯 090-7923-5094

歴史科学研究部会

部会長 福山 裕夫

本年度は以下の項目、会議について活動を行った。

1) 地域連携センター公開講座にて、共同研究者らとのミーティングを行った。

以下、演題のみ記す。

開講日：7月2日（日）12：30～14：00

演題：星の古記録

講師：福山 裕夫

開講日：7月2日（日）14：30～16：00

演題：大宰府と九州主朝

講師：古田史学の会 正木 裕

開講日：7月9日（日）12：30～14：00

演題：ヤポネシア論と九州

講師：福山 裕夫

開講日：7月9日（日）14：30～16：00

演題：京都〔北山湾〕に進出した九州王朝

―隋書倭国伝の秦王国と太秦氏―

講師：古田史学の会 古賀達也

開講日：10月8日（日）12：30～14：00

演題：筑後の古代史 ―近年のエビデンスから―

講師：福山 裕夫

開講日：10月8日（日）14：30～16：00

演題：高良山雑記を読む

講師：郷土史家 綾杉 るな

開講日：10月22日（日）12：30～14：00

演題：半島交流史を読む

講師：福山 裕夫

開講日：10月22日（日） 14：30～16：00

演題：天智天皇と柿本人麻呂

講師：神功皇后紀を読む会 福永 晋三

2) これまでのサマリーとして、年次的に遅れているが、以下研究ノートを資料として年報とした。

九州の歴史民俗を考える：久留米大学公開講座ノートより

Recent Topics About Ancient History, Folklore in Kyusyu Island, Japan：

Abstracts in the Open Lecture of Kurume University 37-65、60、久留米大学比較文化研究所紀要 2024

3) これまでの成果の一部を、比較文化精神医学（trans-cultural psychiatry）、比較文化保健、心理学（trans-cultural psychology, health）の分野に反映するために、本年度より日本多文化精神医学会学術総会（大正大学 東京 Sep. 2023）に参加し、多文化間精神保健専門アドバイザー（Transcultural Mental Health Advisor, TMHA）講習に参加し、これらの分野を通して地域貢献することとした。

4) 関係者により、以下の出版がなされた。

古代に真実を求めて——古田史学論集第二十六集 九州王朝の興亡 明石書店
2023/6/22 ISBN 4750355968

内容は以下のものとなっている。

倭国（九州王朝）略史 [正木裕]

古代日中交流史研究と「多元史観」

—五世紀～七世紀の東アジア国際交流史の基本問題— [谷本茂]

九州年号の証明—白鳳は白雉の美称にあらず— [服部静尚]

『群書類従』に収録された古代逸年号に関する考察 [満田正賢]

倭国律令以前の税体制の一考察 [服部静尚]

多利思北孤の「東方遷居」 [正木裕]

太宰府出土須恵器杯Bと律令官制—九州王朝史と須恵器の進化— [古賀達也]

「壬申の乱」の本質と、「二つの東国」 [正木裕]

柿本人麿が詠った両京制—大王の遠の朝庭と難波京— [古賀達也]

『後漢書』「倭國之極南界也」の再検討 [谷本茂]

「多賀城碑」の解説―それは「道標」だった― [正木裕]

七世紀の須恵器・瓦編年についての提起 [服部静尚]

コラム① 蹴鞠ではなく打毬用の木球

コラム② 年縞博物館と丹後王国

5) 2024 年度に向けての所感

大矢野栄名誉教授におかれましても、2023 年度は公開講座や学術活動にご協力いただきました。

近年、本分野は大きなムーブメントが起きており、「Nature」などの有名学術雑誌に掲載される項目が増えております。これらの結果は、これまでの人文科学的な常識や一部の宗教観さえインパクトをあたえる可能性すら指摘されているところです。2022 年のノーベル生理学・医学賞を受賞したマックス・プランク研究所の研究者は、現代人のゲノムに絶滅したネアンデルタール人やデニソワ人の遺伝情報の一部が残っていることを明らかにし、現生人類（ホモ・サピエンス）と旧人類が交配していた可能性を示唆し、世界に衝撃を与えたのは、その最たる例かと考えます。福山としては、これらのエビデンスを地域における事柄に落とし込みながら、上記の分野の関係性を述べていきたいと考えております。図らずも、大勢の参加者に恵まれまして、大学の公開講座としては異例の受講人数を維持できたことが、上記の出版等に結びつきましたことを何よりも支えてくださったオーディエンスに感謝申し上げます。

筑後川流域圏研究部会

部会長 浅見 良露

筑後川流域圏研究部会は、筑後川流域圏を対象として、多方面から研究を行う事を目的としている。2006年度から2015年度は、比較文化研究所のプロジェクト研究として、下流域から上流域までの地域研究を行い、2016年度に研究部会として再発足してからは、流域圏の一部または全体について、メンバー各自によるテーマ別の研究を行っている。さらに、2019年度に「古賀河川図書館」の全蔵書が久留米大学御井図書館に寄贈されるにあたって、その活用を考える研究会をスタートさせた。

2023年度も引き続き、古賀河川図書館の利活用に関する共同研究およびテーマ別研究が行われた。

1. 久留米大学御井図書館古賀邦雄河川文庫開設記念シンポジウム

筑後川・四大井堰：その歴史と未来を考える－袋野堰・大石堰・山田堰・床島堰－

2023年12月17日(日)、久留米大学御井キャンパス 500号館 51A教室において、標記シンポジウムを開催し、約90名が参加した。シンポジウムに先立って、大刀洗町ふるさと案内人による紙芝居「筑後川と大堰神社」の上演および古賀邦雄河川文庫の紹介が行われた。

シンポジウムにおいては、まず、コーディネーターの高木典雄うきは市長から、四大井堰の概要説明があり、次いで、パネリストである各井堰の代表者から、各井堰や、井堰から取水した各用水の開削工事の経緯や特徴、歴史的意義などについて説明をいただいた。特に手作業で行われた江戸時代における工事の困難さやそれを克服する技術や工夫が紹介された。そして、高木市長をコーディネーター、各井堰の代表者をパネリストとしてのパネルディスカッションおよび質疑応答が行われた。



今回のシンポジウムを通じて、古賀邦雄河川文庫を利活用した、筑後川流域圏研究がさらに進展されることが期待される。

2. テーマ別研究

(1) 野田宇太郎

浦田義和

小郡市の野田宇太郎文学資料館主催の生誕祭献詩賞選考評を以下の通りまとめた。

第34回は、小学生は小郡市を中心として250点近く、中学生は、やはり小郡市を中心

として1,300点近く、一般（高校生4点を含む）が、北海道から鹿児島まで（福岡県24点）の140点近くが集まった。このことから、地元小郡市の小中学校では、恒例として定着していると言える。また、全国からの一般の応募もかなりの数である。ITの席捲で、文学形式はどうなるのかと懸念されているが、継続は力なりであろう。考えてみれば、ITは、やはり道具にすぎないので、どんなに普及しても、AIに、個人が自分で何かを作り上げるキラキラした最高の楽しみ迄は奪えないだろう。模倣は所詮技術に過ぎない。閑話休題。

全体の感想としては、小中学生の部における、コロナによる閉塞感の黒雲がだいぶ晴れて来たような感がある。小学生の部では、花火大会や昆虫や花、家族旅行、そして食べ物なことなど、多様なテーマが表現されていた。中学生の部では、それらに加えて、学校生活や社会的事項、生き方についてなどが表現されていた。一般の部では、過去の思い出や現在の心境などの吐露が多かった。注文として、他の選者から出た意見として、小学生には、まとめ方が典型的、オノマトペ（擬音語、擬態語）も定型的事、中学生には、観察力の不足、言葉の上滑りなどが指摘された。私は、それらに加えて、一般の部には、エッセイ的なものが目に付くので、もっと詩形を意識してほしいと思った。小郡市出身の日本近代文学研究家野田宇太郎と久留米市や小郡市とゆかりの深い日本浪漫派作家檀一雄は、双方とも詩人としての側面を持っていた。

(2)久留米市の洪水対策

河内俊英

洪水問題が頻発している北野等の野菜栽培地域では、柳川の様な掘割による遊水対策を考える必要がある。北野は元々低水地が多く、稲作なら可能だが現在行われているような葉物野菜やトウモロコシ、イチゴなどの水に弱い作物類には向かない地域である。近年ダムや天候傾向によって可能であった広範囲の周年、商品作物類をけいぞくするには、根本的な対策が必要である。その方法としては、身近なモデルがある本格的な掘割による方法を実施することである。

現状のように個別にフェンスを築いて対応するには、さらに高く栽培地域全体を囲む必要がある。個人でできるレベルでは無理があるように思われる。身近に存在するモデルにならない、本格的に掘割を築く方法で野菜地域全体を地域単位で実行することが、現実的で可能性の高い現実的な方法であると考えます。

(3)一人暮らし後期高齢者の日常の不安と相談先との関係性―久留米市の高齢者調査の結果を基にして―

池田博章(特別研究員(B))

本研究は各日常生活圏域の実情と相違点に着目して比較検討を実施し、一人暮らし後期高齢者の日常の不安と相談先との関係性を明らかにすることを目的とした。コロナ禍

（2021年10～12月）に実施された「令和3年度久留米市在宅高齢者基礎調査」から得られた一人暮らし後期高齢者6,628人のデータを基に、地理情報システム（GIS）を活用した日常生活圏域の実態分析をした。本研究における結論は次のとおりである。①不安は特にない状態、健康や介護の不安が低い状態では、主に親族が相談先として選択される。②健康や介護の不安が高まると、民生委員や地域包括支援センターが相談先として選択さ

れ、生活機能の低下等との関連が示唆された。③生活費の不安が高まると、地域包括支援センターや市役所（総合支所）が相談先として選択され、社会的孤立との関連が示唆された。④災害時避難の不安は、地域で起きた災害との関係が示唆され、地域の実情により相談先の選択が異なった。また、相談先の地域包括支援センターは、健康や介護の不安の割合が高い圏域と生活費の不安の割合が高い圏域の双方から相談先として選択される傾向があった。団塊の世代が後期高齢者となる 2025 年問題の解決には地域包括ケアシステムの単位とする日常生活圏域内において、地域包括支援センターを中核とした包括的な支援体制のさらなる強化が求められる。

なお、本研究の成果は比較文化研究所紀要（第 60 輯、2024 年 3 月発行）に記載した。

(4) 筑後の文化擁護者・野田宇太郎と丸山豊の出会い **高木恵(特別研究員(B))**

筑後地方を代表する詩人である丸山豊と小郡出身で文学散歩の創始者でもある野田宇太郎の出会いについて研究を行った。彼等は同じ筑後地方で生を受け、同じ時代に生き、若かりし頃に出会って以来生涯の交友を持った。

福岡県小郡市松崎出身の野田宇太郎は昭和 5（1930）年、久留米に文具店を開く。この文具店は旧制中学明善校の裏門近くに立地し、たちまち文学青年たちのサロンと化した。そこへ足繫く通った青年の一人が明善中学生であった丸山豊である。丸山は昭和 2（1927）に中学明善校へ入学をしている。2 人の年の差は 6 歳である。

丸山は野田との出会いを次のように書いている。

私がかよっている中学校の裏門ちかくに小さな文具店が開店した。あそこの若い主人は詩を書くらしい、そういう噂がいちはやく私たちの耳にとどいた。会ってテストをしてみよう、生意気な考えをもって詩の仲間の俣野衛と店をたずねた。ノートや画用紙の類をばらばらとならべた貧弱な店。しかし二階に上ってみると、文学から美術におよぶ書籍がいっぱい。早稲田をよんどころなく退学し、短距離の選手であることをあきらめ、筑後小郡の生家をはなれた宇太郎さんであった。

また、丸山は久留米時代の野田宇太郎を知る人物として安西均、岡部隆介、俣野衛、牛島春子などを挙げている。文化擁護の理念に共感を持ったのか、文房具店閉店後や野田が上京したのちも互いの交流は続くこととなる。

イスラーム研究部会

部会長 佐々木 拓雄

メンバー各自の取り組みを深める 1 年となった。佐々木は、インドネシアの人びとにおける労働や政治、宗教をめぐる意識の変化を現地にて追跡するなどしながら、もうひとつのテーマである日本在住ムスリムの生活と宗教意識について知見を深めるために、近年建設された香川県・坂出市のモスクを訪問し、聞き取り調査を行なうなどした（2 月）。岡内大三『香川にモスクができるまで』（晶文社、2023 年）に触発され、その著者と、モスクの建設に尽力した現地ムスリムコミュニティのリーダー（インドネシア人）や、介護士、工場労働者、農業従事者などとして生活しながらモスクに集う人々と語らう時間を得て、有意義な調査となった。

古賀は、2024 年 3 月 17 日、大牟田文化会館における有明圏域教養講座（聴講者 60 人程）で、「パレスチナ問題：ハマス・イスラエル紛争（紛争の背景を読み解く）」と題して、質疑応答を含めた約 90 分にわたり講演を実施した。

地中海地域研究部会

部会長 畠中昌教

1 部会活動

2023 年度はコロナ禍が収まり、ウクライナ紛争や円安といった不安要素はあったものの、海外渡航の制限はなくなった。したがって、部会各メンバーは可能な範囲で国内外における研究活動を行った。

また、これまでの部会活動の成果取りまとめとして、畠中が関係するスペイン・ラテンアメリカ関連の研究会・セミナー成果を比較文化研究所紀要（特別号）として発行する準備を始めたが、論文数などがまだ不足しており、次年度以降も関連セミナーを行いつつ、成果を蓄積して刊行につなげることを目指すことになった。具体的には「九州スペイン研究会 2023 年度夏季研究大会」を、2023 年 8 月 17・18 日、地中海地域研究部会共催として実施した。本部会に関係が深いのは、8 月 17 日に実施した企画セッション「イベリア半島・ラテンアメリカの自然・環境」である。

2 部会メンバーの研究成果

「ローマ時代の北アフリカの社会と農業」（池口 守）

ローマ時代の北アフリカ（現在のチュニジア）の社会と農業をテーマとして 2024 年度の科学研究費基盤 B 採択を目指す学際的研究グループのメンバーであることから、ローマ農業史を専門とする立場で、この地域の考古資料について調査を進めた。特に関心をもって取り組んでいるのが、(a) バグラダ川（現メジェルダ川）における農産物の河川輸送と、(b) 発掘により出土した動物遺存体の研究である。チュニジア北部の都市、アルティブロスのウィラの浴場のモザイクに、海や川で使用されたと思われる 25 点の船の絵とその名称が示されており、その一部は河川輸送に用いられた舢舨と考えられる。一方、この都市の中心部にあるカピトリウム（ユピテル神殿）の隣接区域で近年行われた発掘では多数の獣骨が出土しており、主要な家畜としてはヒツジ・ヤギの骨が最も多いが、ローマの支配を受けた後 1～3 世紀にはブタの比率が上昇したことが確認でき、ローマの食文化が一定の影響を及ぼした影響が指摘できる。

当該地域は帝政初期の首都ローマが必要とした穀物の約 3 分の 2 を供給したことを古代の史料が伝えており、穀倉として極めて重要な位置を占めたことは疑い得ない。上記の研究内容は 2024 年 5 月に開催された日本西洋史学会のシンポジウムで報告したが、地中海における農産物の輸送という論点は本研究部会のテーマにも合致することから、研究部会の成果として論文発表に繋げることを計画している。

「日本近代文学とイスラーム」（浦田義和）

2023 年度の個別研究タイトルは「日本近代文学とイスラーム」であった。このテーマにかかわって、2023 年 10 月から 12 月まで、エジプト国立バンハー大学日本文学科での講義を実施した。10 月と 11 月は自宅からのオンライン講義を実施し、12 月には、現地で対面講義を実施した。また、テーマにかかわる文献調査を、沖縄県立公文書館で実施した。

講義内容は以下の通り。

日本文学入門一言語とは何か、日本語の特徴は何か、日本文学・作家の概要。

日本古典文学—日本古典文学の特徴、日本古典文学の代表作家・作品紹介

日本近代文学—日本近代文学の特徴、日本近代文学の代表作・作家紹介

文献調査内容は以下の通り。

戦前沖縄出身研究者のイスラーム研究著作の調査・複写資料収集。

「ギリシャの地域漁業ガバナンス」(崎田誠志郎)

2023 年度は科研費(若手研究)「ギリシャの沿岸漁場利用をめぐるローカルな規範・集合行為と漁業者組織」の初年度であり、2023 年 10 月にはギリシャ・ナクソス島で最初の予察調査を実施した。また、パンテオン大学(アテネ)の Stella Kyvelou 教授とギリシャ島嶼域のコミュニティ研究に関する打ち合わせを実施して、今後の本調査に向けた地盤固めをおこなった。

分担研究者となっている科研(基盤 B)「順応的漁場環境ガバナンスにおける村落と家族」の一環として、ギリシャ西部のメソロンギ=エトリコラグリーンにおける漁業者組合を対象とした現地調査を実施した。成果は日本地理学会春季学術大会(2024 年 3 月、青山学院大学)にて口頭発表したほか、発表に先立つ 2024 年 2 月には同内容の論文を Geographical Review of Japan Series B に投稿した(査読中)。

崎田誠志郎 2024. ギリシャ・メソロンギ=エトリコラグーンの漁場利用をめぐる漁業者組合の社会関係. 2024 年日本地理学会春季学術大会、2024 年 3 月 19 日、青山学院大学(口頭発表)

「スペインにおける自然保護・ワインツーリズム」(畠中昌教)

本年度の研究テーマは、これまで行ってきた、スペインのワインツーリズム、国立公園に加えて、ガストロノミーツーリズム、歴史的景観形成と都市計画に関しても調査を行った。また、招待講演・報告として、サンティアゴ巡礼、ワインツーリズムに関して依頼があった。

スペインのワインツーリズムに関しては、DOC リオハにおけるワインツーリズムの最新動向の確認とこれまでの調査のフォローアップのため、2023 年 9 月~10 月に、スペインのマドリッド州、バスク州、リオハ州において現地調査を実施した。

今回の調査の成果としては、これまで調査が出来ていなかったバスク州における観光・

農業・商工関連の機関・団体にヒヤリングが行えたこと、そしてコロナ後のワイン・ガストロノミーツーリズムの現状を実際に観察できたことである。リオハ州側についてはワインツーリズム関連機関・団体への追加調査が行え、さらにワイン蔵やレストランにおけるワイン・ガストロノミーツーリズムを観察できたことも重要であった。

畠中昌教(2023a).「スペイン北部ピコス・デ・エウロパ国立公園の100年」.『スペイン史学会会報』 131:3-4.

畠中昌教(2023c).「サンティアゴ巡礼の道とガリシア観光：緑・青・灰」.バルセロナ文化センター Centre Cultural Barcelona (CCB) サンティアゴ巡礼の道セミナー. 2023年7月29日,バルセロナ文化センター(京都府京都市). (招待講演,口頭発表,日本語)

畠中昌教(2024a).「スペインのワイン生産地域とワインツーリズム」.田主丸郷土会 2023年度地域史講座 第2回. 2024年2月24日,田主丸コミュニティセンター(福岡県久留米市田主丸町). (招待講演,口頭発表,日本語)

2. 研究員発表会

1) はじめに

2006 年度よりスタートした当発表会は、2023 年度で第 18 回目の実施となりました。

2023 年度は 4 名の研究員が当研究所に所属しており、当発表会では全員発表を行いました（1 名はエジプトから Zoom で参加）。なお、発表予稿は比較文化研究所の WEB サイトに記載しています。

2) 発表会の日時、会場、タイムスケジュール及び発表形態

①日時：2023 年 3 月 29 日（金）13：00-15：00

②会場：御井本館 4 階 140 教室

③タイムスケジュール

- (1) 12：40～13：00 受付
- (2) 13：00～13：15 開会挨拶
- (3) 13：15～13：40 研究発表 1
- (4) 13：40～14：05 研究発表 2
- (5) 14：05～14：30 研究発表 3
- (6) 14：30～14：50 研究発表 4（Zoom）
- (7) 14：50～15：00 閉会挨拶

④発表形態

1 人 25 分（口頭発表 20 分 質疑 5 分）

座長 原口雅浩（比較文化研究所所長） タイムキーパー 山下聡子（庶務課）

⑤ プログラム

	研究員氏名	タイトル
1	永吉 守	産業遺産をいかに保存するか
2	三橋 優介	主任介護支援専門員の地域ネットワーク活動における現状と課題 —管理者へのアンケート調査から—
3	小田村 悠希	知的障害者グループホームの世話人の職業的アイデンティティに関する考察
4	Ghada Abdelkareem	アラブ現代詩に於ける広島イメージ

3. 日誌

2023年（令和5年）

4月26日（水）	比較文化研究所運営会議
5月23日（火）	比較文化研究所会議（書面）
6月20日（火）	比較文化研究所運営会議（書面）
6月26日（月）	比較文化研究所会議（書面）
7月 7日（金）	比較文化研究所運営会議
8月21日（月）	比較文化研究所会議（書面）
10月 4日（水）	比較文化研究所運営会議
11月 1日（水）	比較文化研究所運営会議
12月 6日（水）	比較文化研究所運営会議

2024年（令和6年）

2月15日（木）	比較文化研究所会議
3月29日（金）	比較文化研究所運営会議

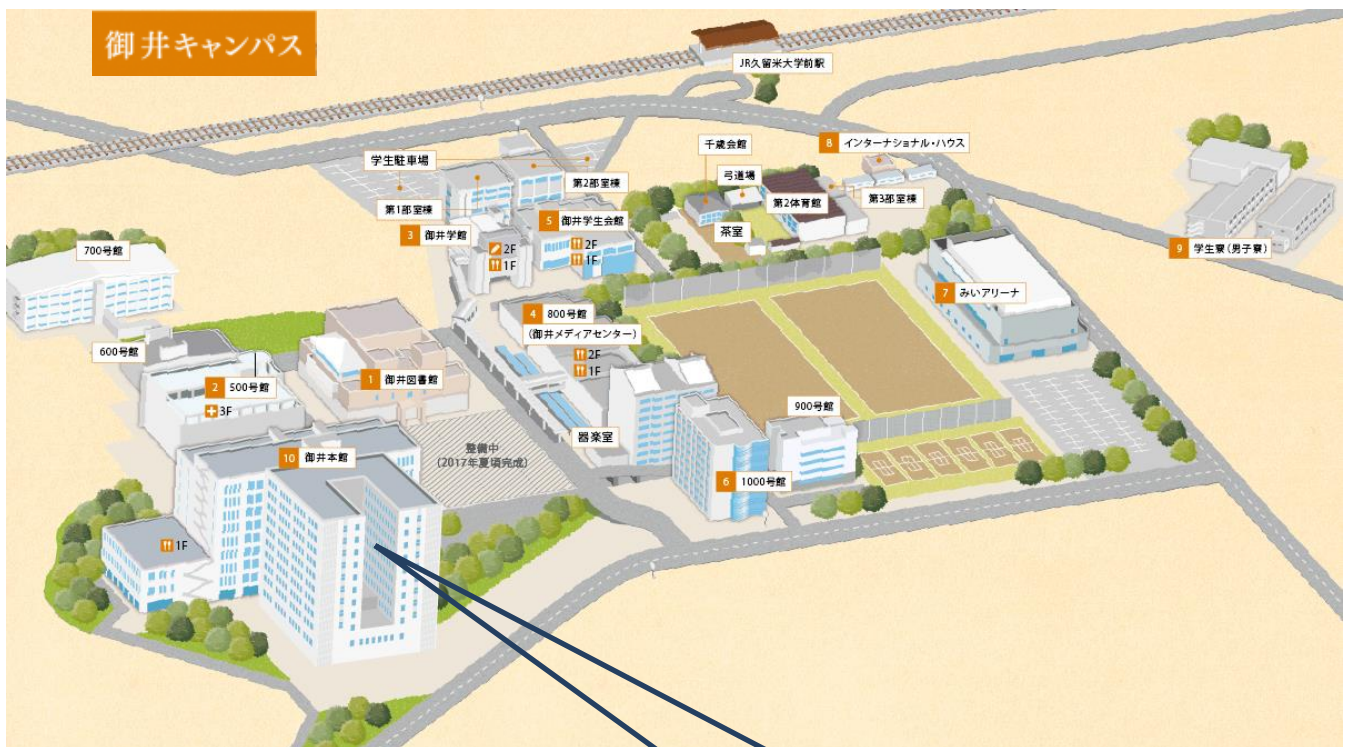
※部会活動を除く

施設・設備

比較文化研究所は、1987年の設立当初は、旭町キャンパスの大学本館3階に設置されましたが、大学院比較文化研究科が開設された1989年に、旭町キャンパスから御井キャンパスに移りました。その後数回の移動を経た後、2015年3月に現在の御井本館8階に移動しています。研究所の部屋は2室あり、研究所長室、会議・研究会室として使用しています。

研究所の資料室（現経済学部共同研究室）には、紀元前3世紀に不老不死の薬を求めて渡来したとされる「徐福」に関する図書が保管されていました。これは、元佐賀テレビ副社長内藤大典氏（故人）が収集された図書です。図書の整理を進め、現在、博多大学準備委員会に寄贈されています。

[案内図]



御井本館 8階
○比較文化研究所長室
○研究室
○共同研究室